

# ビジネス・エシックスの方法論的基礎づけ

## —機能主義と解釈主義アプローチの検討—

名古屋商科大学 総合経営学部専任講師 高浦 康有

### 要点

本報告では、これまでの組織論的研究における規範分析のアプローチも含めた広義のビジネス・エシックスを、ハーバマスの解釈学の観点を援用して批判的に検討しつつ、ビジネス・エシックスの実証的方法論の体系化をめざした総合的な基礎づけを行う。

### キーワード

ビジネス・エシックス、 機能主義、 解釈主義、 ハーバマス、 イデオロギー批判

## 1. はじめに

米国では1970年代以降、大銀行によるマネーロンダリングやウォール街でのインサイダー取引など経済犯罪が顕著になり、法的規制の必要性とともにビジネス・スクールにおける倫理の研究と教育の必要性が声高に主張されはじめた。このような社会的事情を背景にして、いわゆるビジネス・エシックス（経営倫理学）が社会科学の一領域として形成された。ビジネス・エシックスは、環境汚染など企業の反倫理的行動を分析するマクロ的研究から、虚偽報告など管理者の倫理的意思決定を分析するミクロ的研究まで内容は多岐にわたっているが、実践的な学問の性格ゆえに、その研究の分析枠組みについて方法論的な検討が加えられることはあまりなかった。一方で、組織研究の立場からはパーカー（Parker, 1995）が、ハーバマス（Habermas, 1987）の批判的近代主義（critical modernism）の考えに依拠して、ビジネス・エシックスの基礎づけにつながる議論を展開している。パーカーによれば、組織における人種的差別の是正といった倫理的主張が真理とみなされる条件は、すべての他者が潜在的に同意するという見込みにかかっており、まさに理性的な合意に到達するための説得によっているという。その背景には、近代の合理主義に見られる手段的理性の考え方を克服するとともに、ニヒリズムや相対主義に陥らないためのコミュニケーション的理性を重視するハーバマスの思想がある。本報告では、これまでの組織論的研究における規範分析のアプローチも含めた広義のビジネス・エシックスを、ハーバマスの解釈学の観点を援用して批判的に検討しつつ、ビジネス・エシックスの実証的方法論の体系化をめざした総合的な基礎づけを行ってみたい。この基礎づけによって、ビジネス・エシックスが今後検討す

べき実証的研究の課題も明らかになるであろう。この作業は、ビジネス・エシックスの方法論的分類に関する予備的考察（狭義のビジネス・エシックス論を対象にする）と、独自の分類枠組の提示（広義のビジネス・エシックス論を対象にする）によって行われる。

## 1.1. 実証論的アプローチと規範論的アプローチの対立

1970年代以降、米国のビジネス・スクールを中心に形成された（狭義の）ビジネス・エシックスにおいては、個人や企業はどのように行動すべきかを論証する規範論的アプローチ（normative approach）が主流であるが、個人や企業の倫理的行動がどのような要因によって影響を受けるかを解明する実証論的アプローチ（empirical approach）の展開も見られる。以上のような規範論的アプローチと実証論的アプローチの存在がビジネス・エシックスにおいて明確に意識されるようになったのは1990年代に入ってからであり（Trevino & Weaver, 1994）、両アプローチの理論的前提の対立をどのように解決すべきかをめぐってさまざまな方法論的反省がなされてきた。これらの議論によれば規範論的アプローチと実証論的アプローチの関係性の理解に関して以下の2つの立場が対立していることが分かる。

- (1) 社会科学における事実命題／価値命題の分離という論理実証主義の前提に基づいて、両アプローチの接点を認めない並行説（parallel view）
- (2) 実証的研究の枠組に規範理論の評価的カテゴリーや概念を導入することで、両アプローチは統合されるとする統合説（integrative view）

まず(1)の並行説の例としては、組織における罰則が個人のパフォーマンスをどのように高めるかに関する行動理論の諸研究（Baron, 1990; Baum & Youngblood, 1975; Podsakoff, Todor & Skov, 1982）があげられる。これらの実証的研究では、罰則が道徳的に適切かどうかをとくに議論することなく、罰則がコントロールの手段として効率的であるかどうか議論のポイントが置かれている。しかしウィーバーとトレビーノが指摘するように、これらの研究は効率性の観点から（そして他の観点を排除して）罰則の望ましさを評価できることを前提にしている点で、すでに規範的な態度に関わっているのであり、純粋に価値中立的であるとは言えない。むしろこのことに自覚的でなければ、こうした実証的研究は、組織の秩序と機能の維持を至上命令として推し進める道具になりかねないのである。ビクターとスティーブズ（Victor & Stephens, 1994）によれば、これら実証論的アプローチのメタ理論的前提となっているのは、パーソンズ（Parsons, 1947）に代表される＜構造－機能＞主義者（structural-functionalist）の社会学および組織論である。この＜構造－機能＞主義の考え方に従えば、ある社会および組織構造の安定をもたらす制度的要因として倫理や規範が考察されることになる。

つぎに(2)の統合説においては、規範論的アプローチと実証論的アプローチが相互の理論構

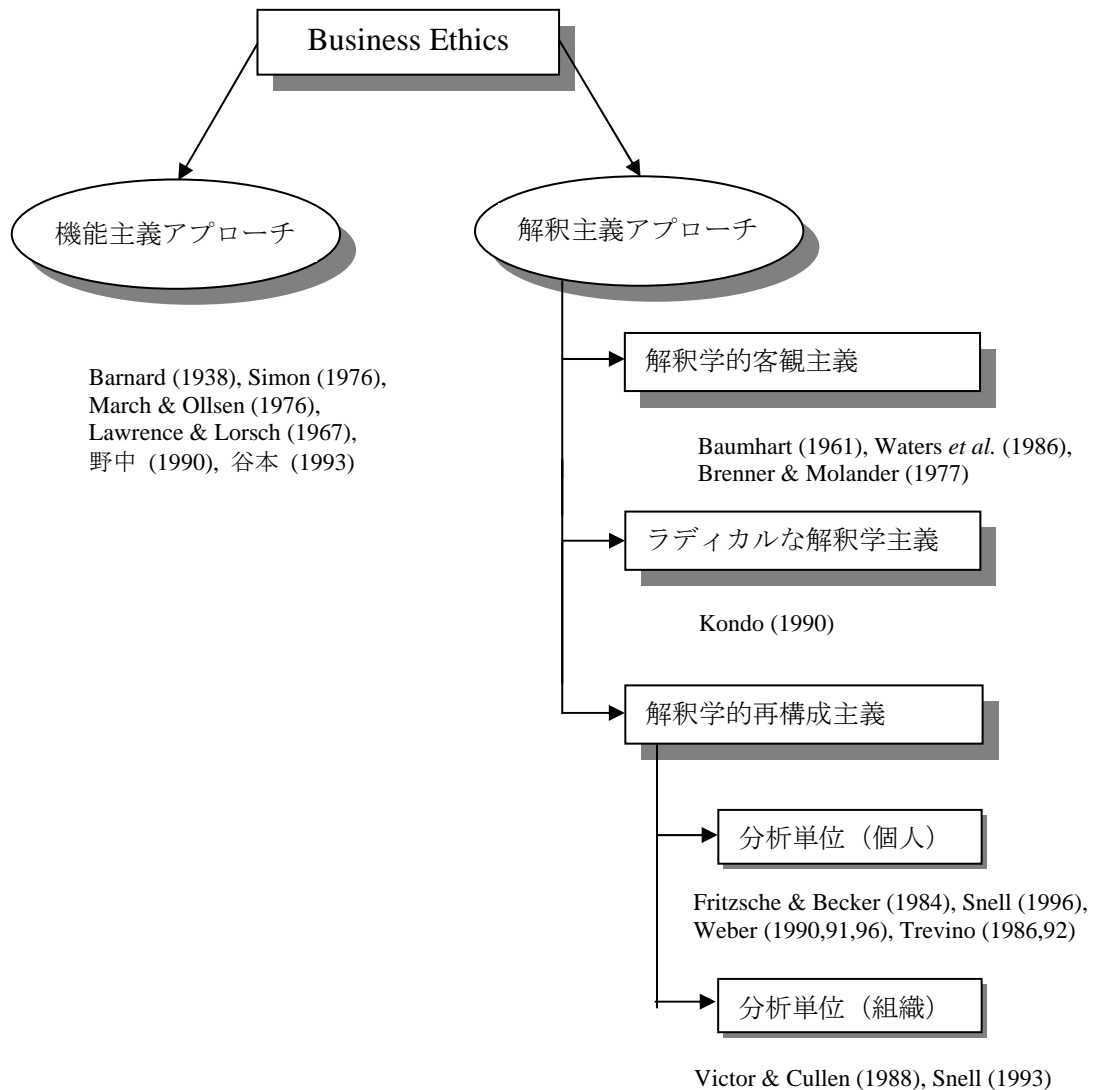
成に関わっているという視点が表れる。統合説の例としてビクターとスティーブズは、コールバーグ (Kohlberg, 1969) の道徳性発達理論を用いて管理者の道徳的ジレンマに関する推論の特徴を調べた実証研究 (Derry, 1989; Trevino, 1986; Weber, 1990) をあげている。コールバーグの理論においては、道徳性の発達段階の構成に関してロールズ (Rawls, 1971) の正義に関する規範概念が導入されており、コールバーグの理論を扱って経験的な研究を行うビジネス・エシックス論者もまた、ロールズの規範モデルを受け入れていると見なすことができるからである。ウィーバーとトレビーノによれば、これら統合説に位置付けられる研究の前提には、実証的研究はもはや価値中立的に遂行され得ず、研究者の価値前提と不可分であるという考え方が明示的に表われている。すなわち、社会的事実 (social fact) は、「行為者が日常的な社会的活動において行っていることに関してもつ知識と独立して存在するわけではない」 (Giddens, 1984, p.26; Weaver & Trevino, 1994 における引用)。こうした解釈主義 (interpretivism) の考え方に従えば、社会的事実はそのそれぞれの行為者の主観的な解釈を通して構成されていることになり、さらにその社会的事実を分析する研究者もまた彼らの日常的な解釈枠組に依拠して研究を行わなければならないことになる。

## 1.2. ビジネス・エシックスの方法論的分類

以上の考察においては、ビジネス・エシックスにおける実証的研究の遂行に際し、そのメタ理論的前提として<構造-機能>主義、そして解釈主義の二つの流れがあることがうかがえた。以下では<構造-機能>主義を社会学史上のルーマン (Luhmann, 1968) による理論的展開をふまえて機能主義として捉え直し、この機能主義と解釈主義という2つのアプローチの観点から、あらためて広義のビジネス・エシックスの方法論的分類を行う (次ページ表1参照)。ここでいう方法論とは、社会科学的に妥当な知識の獲得へと至るための手続きの方法をさす。したがってビジネス・エシックスの方法論的分類にあたっては、道徳事象に関する妥当な知識はどのように獲得可能であるかというメタ理論的な前提が考慮されなければならない。

そこでビジネス・エシックスを実証的研究の方法に関して「機能主義アプローチ」と「解釈主義アプローチ」の2つに分類する。機能主義とは一般に、ある対象を、全体との関わりにおける要素間の相互作用の見地から機能的に把握する立場のことを言うが、ここでは道徳事象に対して、ある社会的システムにおける機能的な作用の観点から外在的に理解するアプローチとして定義される。一方、解釈主義の立場では、芸術作品のコンテクストの解釈と同じように、人間主体の発話行為を何らかの妥当な意味に従って理解することが目指されるが、ここでは道徳事象に対して、コミュニケーションを通じた内在的な了解を重視するアプローチとして定義される。

表 1. ビジネス・エシックスの方法論的分類



## 2. 機能主義アプローチの検討

まず最初に検討する機能主義アプローチについては、広義の範疇のビジネス・エシックスとしてバーナード以降の組織論的研究における規範分析をとりあげ、これらの理論における道德、規範概念について考察を行う。まずバーナードの行動主義的な道德概念を扱い、つぎにサイモンの価値相対主義をとりあげ、さらに「ごみ箱モデル」とコンティンジェンシー理論における環境適合的な規範概念について考察し、最後に非平衡性をもつ規範概念について「組織的知識創造」理論と企業社会システム論を取り上げながら検討していく。これらの機能主義アプローチの理論では組織システム内での規範の生成プロセスについてさまざまな視点が提供されているが、システ

ム機能の観点から位置づけられる規範が、システム内の行為者によってどのように評価され、意味付けられているのかを解釈するといった相互了解の視点は十分に示されていない。

### 3. 解釈主義アプローチの検討

つぎに、以上で述べた機能主義アプローチの限界を補うものとして考えられる解釈主義アプローチについて検討する。まず、ハーバマスに従って解釈主義の3つの主要な立場、(1) 解釈学的客観主義、(2) ラディカルな解釈学主義および(3) 解釈学的再構成主義があることが示される。そして3つの立場それぞれに対応した社会科学の研究タイプとビジネス・エシックスの研究事例を考える。

(1) の解釈学的客観主義のアプローチは研究者自身の見解や信念をできるだけ抑制して現象に純粹にアプローチするという現象学的方法論に一致するが、これに対応する研究例としては、バームハート (Baumhart, 1961) がハーバード・ビジネス・レビュー誌の読者を対象にして行った管理者の倫理的思考パターンを理解する事例研究などがあげられる。

つぎに(2) ラディカルな解釈学主義の立場では、(1) の立場のような素朴な共感的理解は成立せず、研究者は自己の歴史規定的な解釈枠組みから逃れることはできないということが前提とされている。その例としてはナイト (Knights, 1997) によって、組織研究における権力/抵抗、経営者/労働者という従来の二項対立の枠組を脱構築するものとして評価されたコンドウ (Kondo, 1990) のエスノグラフィックな研究があげられる。

(3) 解釈学的再構成主義のアプローチは、ある意味の解釈を(2) のモノローグ的な了解にとどめて矮小化するのではなく、メタ解釈学的なレベルにおける妥当性の観点から秩序付け、それによって意味の「合理的な再構成」を可能にすることをめざす。これに対応するのは、6段階の発達段階図式に基づきインフォーマントの道徳的判断を再構成するコールバーグ (Kohlberg, 1969) の道徳性発達理論であり、ビジネス・エシックスの分野ではこの理論を適用して管理者の道徳的推論レベルを調べた J・ウェーバー (Weber, J., 1990) の研究などがあげられる。最後に、個人の道徳的判断の志向性しか検出できないコールバーグ理論の限界をこえて、企業体としての意思が形成されてくるダイアローグ的な判断過程を明らかにするため、組織の道徳的次元すなわちイデオロギー的側面の解釈という方向へモデルを拡張する緒研究について触れる。

#### <主要参考文献>

- ◆ J.ハーバマス『道徳意識とコミュニケーション行為』三島憲一、中野敏男、木前利秋訳、岩波書店、1991
- ◆ L.コールバーグ、C.レバイン、A.ヒューワー『道徳性の発達段階:コールバーグ理論をめぐる論争への回答』片瀬一男、高橋征仁訳、新曜社、1992
- ◆ 高浦康有(2001)「メディア・リテラシーの技法による企業理念の解釈学的再構成について」

『経営哲学論集』第17集（未刊）

- ◆ Weaver, G. R., & Trevino, L. K. (1994). “Normative and empirical business ethics: Separation, marriage of convenience, or necessity?” *Business Ethics Quarterly*, 4(2), 129-143.

